

『菩提心の解説』と名付けられる偉大なる導師アーリヤ・ナーガールジュナが著されたもの

サンスクリット語で、ボーディチッタ・ヴィヴァラナ・ナーマ
チベット語で、チャンチュプ・セムキ・デルパ・シェーチャワ
(菩提心の解説と名づけられるもの)

誉れ高き金剛薩埵に礼拝いたします

「すべての現象〔の真実成立〕を離れ
〔五〕蘊・〔十八〕界・〔十二〕処の
主体と客体〔の真実成立〕をすべて捨て
〔すべての〕現象の無我はみな同じなので
我が心は無始の時より不生であり
空の本質を持つものである」
と、このように言われた

勝利者仏陀たち、偉大なる菩薩たちが大いなる悟りに向かって〔菩提〕心を起こされたように、私もまた、救われていない有情たちを救済し、自由を得ていない有情たちを解放し、息のできないものたちが息をすることができるようにし、不住涅槃に至っていないものたちを不住涅槃に至らしめるために、今この時より悟りの真髓に至るまで、大いなる悟りに向かって〔菩提〕心を起こすことができますように。

密教の門に入り、それを修行する菩薩たちが、このように世俗のレベルにおける熱望の本質を持つ菩提心を起こしたなら、瞑想の力によって究極の菩提心を起こすべきである。そのために、その本質について説明しよう。

- 1 菩提心の顕現である
誉れ高き持金剛に礼拝し
輪廻を打ち砕く
菩提心の瞑想について説明しよう
- 2 すべての仏陀たちは
自我、蘊、などの概念に
惑わされることなく
常に菩提心を空の相〔を持つもの〕として見極められている
- 3 慈悲に潤った心で
努力して〔菩提心を育む〕瞑想をするべきである
慈悲の顕現である仏陀は
常にこの菩提心に瞑想されている
- 4 非仏教徒たちが主張している自我を
論理的に分析してみても
〔五〕蘊のすべての中に
そのような存在を見出すことはできない
- 5 〔五〕蘊は存在しているが、永遠ではない
それらは自我の本質でもない
無常なるものと永遠なるもの、その二つが

土台とそれに依存するものになることはない

- 6 自我と言われるものが存在しないなら
行為者と言われるものがどうして永遠でなどありえよう
主体となるものがあればこそ
世間ではあらゆる現象を調べることができる
- 7 永遠なるものは
段階的にも、同時にも、機能を果たすことはできない
故に外の世界にも、内なる世界にも
永遠なる実体は存在しない
- 8 もし〔永遠なる行為者に結果を生む〕力があるならば、どうして〔因と条件に〕依存する
必要などあろうか
〔永遠なるもの〕なら同時に〔すべての〕事物を生み出すはずである
他の事物に依存しているものは
永遠ではなく、〔同時にすべてを生む〕力を持っているのでもない
- 9 すべての事物は常になので
事物であるならば、永遠のものではない
故に、無常なる事物に対して
行為をなす者〔の存在〕を否定しているのではない
- 10 自我などのないこの世界は
〔五〕蘊、〔十八〕界、〔十二〕処
主体と客体などを〔妄分別する〕心によって
完全に打ち負かされている
- 11 利他をなそうとする〔仏陀〕たちによって
色・受・想・行・識
という五蘊が
このように声聞たちに説かれた
- 12 最勝なる両足尊（釈尊）は
色蘊ははじける泡のように現われ
受蘊は水泡の如きものであり
想蘊は蜃気楼に等しく
- 13 行蘊は芭蕉の木に似ており
識蘊は幻のようなものだと
常に五蘊についての教えを
このように菩薩たちに説かれた
- 14 四大の本質を持つものとして
色蘊が明らかに説明されている
物質的な存在ではない残り〔の四蘊〕がなければ〔五蘊は〕生じない
この理由により、〔五蘊は互いに依存して〕成立している
- 15 これらのことを考えて
目や物質的な存在など

〔十八〕 界と言われているものや
〔十二〕 処、主体と客体も〔同様だと〕知るべきである

- 16 物質的な存在を構成する〔部分を持たない〕微粒子は存在せず、感覚器官も存在しない
行為者としての感覚器官もまったく存在しない
生み出す者（行為者）と生み出されたもの（感覚的な意識）が
真実成立として生じたというのは正しくない
- 17 物質的な存在を構成する〔部分を持たない〕微粒子が「感覚的な意識」を生むことはない
それ（部分を持たない微粒子）は感覚器官〔がとらえる対象の領域〕を超えているからである
〔部分を持たない微粒子が〕集まってこれら（感覚的な意識）が生み出されると言うならば
その集合体〔によって「感覚的な意識」が生じるということ〕も受け入れることはできない
- 18 方向性によって分割すると
微粒子にも部分が見られる
部分があると分析されたものが
〔部分を持たない〕微粒子だなどとどうして言えようか
- 19 ひとつの外部対象には
さまざまな認識が生じる
〔ある人には〕魅力的な形も
他者には違って見えている
- 20 ひとりの女性のからだに対して
苦行者、愛欲に執着する者、犬には
屍、欲望の対象、餌だという
三種類の認識が生じる
- 21 〔外部対象はなくても〕類似したものが機能を果たすというのは
夢の中で犯した過失に似ていないだろうか
夢と覚醒時は
〔実体がなくても〕機能を果たしている点で何の違いもない
- 22 主体と客体の本質として
意識に現われてくるものはみな
意識と別個の外部対象としては
まったく存在していない
- 23 故に
真実成立として存在する外部対象は何もない
意識への個別な現われが
物質的な存在として現われてくる
- 24 人は心の錯乱により
幻や蜃気楼
乾闥婆の都などを見るのと同様に

物質的な存在なども現われてくる

- 25 自我へのとらわれを滅するために
〔五〕蘊や〔十二〕処などが説かれたが
唯識の見解にとどまることにより
〔中観派の〕恵まれた者たちはこの（唯識の）見解をも放棄する
- 26 唯識論者たちにとって
この多様な〔世界〕は心〔のみから生じたもの〕として成立している
そこで、意識の自性は何なのか
今それを説明しよう
- 27 これらのすべて〔の現象〕はただ心のみ（＝唯心）である
と釈尊が説かれたのは
凡夫たちの恐怖を取り除くためであり
それが真実だからではない
- 28 遍計所執性、依他起性
円成実性〔という三性〕の
空というただひとつの本質を
心〔のみは真実である〕と妄分別している
- 29 大乘を好む者たちには
すべての現象の無我は等しく
心は無始の時より不生であると
仏陀は要約して説かれている
- 30 瑜伽行者たち（唯識論者たち）は
自分の心を制御して
完全に心を変容させることによって得られる清浄な心は
個別に自己を認識する意識（自証分）の対象であると述べている
- 31 過去はもはや存在していない
未来もまだ生じていない
〔現在は過去と未来に依存して〕存在しているのだから
とどまる場所が変わるなら、どうやって〔意識が〕現在に存在できると言うのか
- 32 あるがままには現われない
現われるようには存在しない
意識の本質は無我であり
意識にはそれ以外の土台はない
- 33 磁石に近づけると
鉄はすぐに引きつけられる
それ（磁石）に心はないのに
心を持っているかのように現われる
- 34 同様に、すべての土台となる意識は真実ではないが
真実であるかのように

行ったり、来たり、動いたりして
〔三〕界を維持しているようである

- 35 海や木は
心がなくても動くのと同じように
すべての土台となる意識も
からだに依存して動いている
- 36 からだがなければ
意識もないことをよく考慮したならば
個別に自己を認識する意識（自証分）が
どのようなものかを説明するべきである
- 37 個別に自己を認識する意識（自証分）と呼ぶことで
それ（自証分）は真実成立だと言っていることになる
それ（自証分）はこのようなもの（真実成立）だと言うことで
〔知る〕力を持たないと言っていることになる
- 38 自分が確信したように
他者にも確信させるため
常に惑わず
賢者は正しい行ないに従事する
- 39 〔主体者の〕意識が認識対象を知るのであり
認識対象がなければ意識は〔生じ〕ない
それなら知る対象（客体）にも知る人（主体）にも〔実体は〕ないと
何故主張しないのか
- 40 心は単なる名前である
名前以外には何もない
意識を単なる名前と見る時
名前にもその自性〔による成立〕はない
- 41 内にも、そして外にも
あるいはその両者の間にも
勝利者（仏陀）たちは心を見出されることはなかった
故に、心は幻のような本質を持つものである
- 42 色や形
主体と客体
男性、女性、中性などの違いに
心の本質があるのではない
- 43 要約すると、仏陀たちは
〔心の本質を〕ご覧になったこともなく、ご覧になることもない
無自性という自性を持つものを
いったいどうやってご覧になれると言うのか
- 44 真実成立とは妄分別であり

妄分別が存在しないことが空である
妄分別が現われるところに
どうして空が存在できようか

- 45 悟るべき対象としての心と、悟る者としての心
如来たちのご覧になったことがない
悟るべき対象と悟る者があるところに
悟りはない
- 46 特徴もなく、生じることもなく
〔実体的な〕存在がなく、言説の道もない
虚空と菩提心と悟りは
不二という特徴を持っている
- 47 悟りの真髓にとどまっておられる
偉大なる仏陀と
慈悲深い〔菩薩〕たちはみな
常に空は虚空のようなものだと知っておられる
- 48 故に、すべての現象の土台であり
寂静で幻に等しく、〔実体にとらわれる〕よりどころがないという
輪廻を打ち砕くこの空について
常に瞑想するべきである
- 49 不生、空
無我について
知性の劣った者たちが瞑想しても
それは空に瞑想することではない
- 50 徳、不徳という妄分別の
連続体の流れが途切れるという特徴を持つ空を仏陀は説かれたが
このような他〔の教え〕を
空とは言わない
- 51 心に対象を持たずにとどまることは
虚空の特徴である
そのような空の瞑想は
虚空の瞑想と言われている
- 52 空という獅子の咆哮は
すべての〔実在〕論者たちを恐れさせる
〔仏陀や菩薩たち〕がどこにおられても
その〔教え〕はみな空〔を示すもの〕となる
- 53 意識は刹那滅〔だと知る〕人にとって
意識は永遠のものではない
心が無常のものならば
どうして空と矛盾することなどあろうか

- 54 要約すると
仏陀たちが心は無常であると説かれたのなら
どうして心は空であると
説かれないことなどあろうか
- 55 無始の時以来
心には常に自性〔による成立〕がなかった
〔はじめに〕自性によって成立していたものの自性が
〔のちに〕なくなったと言っているのではない
- 56 もしそのように言うならば
心の本来のありようを捨てることになる
自らの本質を超えることは
現象のあるがままの姿（真如）ではない
- 57 黒砂糖は甘く
火は熱い〔のが本質である〕ように
すべての現象の自性（本質）は
空であると言われている
- 58 自性は空であると言う者は
虚無論を述べているのではない
それによって
永遠論を述べているのでもない
- 59 無明から始まり
老化〔と死〕に至る「縁起の十二支」の
他に依存して生じるという機能は
夢や幻に似ていると我々は主張する
- 60 〔縁起の〕十二支の輪は
〔六〕道輪廻をまわっている
〔六道輪廻〕以外に
行為の結果を体験する有情は存在しない
- 61 鏡に依存して
顔の像が現われる
〔鏡の〕中にそれ（顔）が移動したのではないが
それ（鏡）がなければそれ（顔の像）もない
- 62 同様に、蘊が結合して
他の生存の中に誕生するが
移動したのではないと
賢者は常に確信している
- 63 要約すると
空である現象から、空である現象が生じる
行為者、行為、結果、果報を得る者は
世俗〔のありように過ぎない〕と勝利者は説かれた

- 64 このように太鼓の音や芽は
〔因と条件の〕集まりから生じる
外界において他に依存して生じるものは
夢や幻のようなものである
- 65 すべての現象が因から生じていることは
〔自性がないことと〕まったく矛盾していない
因は因自体であることに関して空なので
因には〔自性による〕生成がないと理解するべきである
- 66 すべての現象は不生であり
空であると明らかに説明されている
すべての現象とは
要約すれば、五蘊であると言われている
- 67 真如をあるがままに説明することで
世俗の流れが途切れることはない
世俗から離れて
真如を見ることはないからである
- 68 世俗のものは空であると説かれている
空それ自体も世俗のものである
〔因と条件によって〕生じたもの（所作性）と無常のように
〔一方が〕なければ〔他方も〕生じない
- 69 世俗のものは煩惱と行為から生じる
行為は心から生じる
心は〔行為による〕習気の集積なので
習気をなくせば幸せを得る
- 70 幸福な心は寂靜である
寂靜な心は惑うことがない
惑わなければ真如を悟る
真如を悟れば解脱を得る
- 71 真如、真実の極み
無相、究極の真理
最勝なる菩提心
これらは空とも呼ばれている
- 72 空を知らない者たちは
解脱を得る器ではない
そのような無知な者たちは
六道輪廻の生存の監獄をめぐっている
- 73 この空について
このようにヨーギ（修行者）が瞑想するならば
利他をなそうという慈悲の心が

起きることに疑いはない

- 74 父や、母や、親しい友となり
以前に私を助けてくれた
これらの有情たちに
恩を返すべきである
- 75 輪廻の監獄で
煩惱の火によって苦しんでいる有情たちに
私が〔以前〕苦しみを与えたのと同じだけの幸せを
〔今〕与えるのが適切である
- 76 この世の善趣と悪趣という
望む結果と望まぬ結果は
有情を利益することと
害することから生じる
- 77 有情に奉仕することにより
無上の仏陀の境地に至ることさえできる
梵天、帝釈天、強暴な黒天などの
世俗の守護尊たちも
- 78 天や人間の幸福を享受しているのだから
利他によって得られないものなど
この三界には何もないということに
驚くべきことは何もない
- 79 地獄、畜生、餓鬼の世界において
有情たちが実際に体験する
さまざまな苦しみは
有情を害したことから生じる
- 80 飢え、渇き、せめぎあい
打ちのめされる苦しみは
食い止め難く、尽きないのは
有情を害した結果である
- 81 仏陀と菩薩
善趣と悪趣
有情たちのなした行ないが熟した結果には
二つの本質があると理解するべきである
- 82 すべてを尽くして〔有情たちに〕奉仕し
自分のからだのように守るべきである
有情たちへの慈悲と離れることは
毒〔を捨てる〕ように努めてなくすべきである
- 83 声聞たちには〔大いなる〕慈悲の心がないので
劣った悟りを得てはいないだろうか
有情たちを決して見捨てなければ

完全なる仏陀の悟りを得ることができる

- 84 このように
〔有情を〕利益するかしないかによって生じる結果を考察するならば
たとえ一瞬たりとも
自利に執着などしてられようか
- 85 慈悲という安定した根を持ち
菩提心という芽から生じる
利他心の唯一の結果である悟りに
勝利者の息子たちは瞑想する
- 86 瞑想によって安定を得た者は
他者の苦しみに心を痛め
禅定の幸せさえ捨てて
無間地獄にも飛び込んでいく
- 87 これは驚くべきことであり、称讃に値する
これは最も卓越した聖者の行ないである
彼らが自分のからだや財産を施しても
少しも驚くべきことではない
- 88 すべての現象が空であることを知って
因果の法に従う者は
驚嘆の極みであり
卓越の極みである
- 89 有情を守りたいと願う者たちは
たとえ輪廻の泥沼に生まれても
湖に咲く蓮華の花びらのように
その汚れにまみれることはない
- 90 薩など勝利者の息子たちは
空という智慧の火によって
煩惱の薪を燃やし尽くしているが
このように慈悲の心で潤っている
- 91 慈悲の心に支配された方々は
降臨、〔入胎、〕出胎
〔技芸、〕享樂、出家、苦行
菩提〔樹の下に赴き〕、降魔、〔成道〕
- 92 転法輪
諸天の世界に入り
入滅という
これらの行ないを示された
- 93 梵天、帝釈天、毘紐天
強暴な黒天などのお姿で現われて
慈悲の本質を持つ方々は

有情の心を鎮める行ないを演じられた

- 94 生存の道に疲れきった者たちに
〔一時的な〕休息を与えるため
大乘に導いていくために〔声聞・独覚という〕二つの智慧が説かれたが
それらは究極の教えではない
- 95 仏陀に促されない限り
智慧のからだを持つ声聞たちは
禅定に酔いしれて
恍惚としてとどまっている
- 96 さまざまなお姿で〔仏陀に〕促されると
有情を利益するために慈悲の心を起こし
功德と智慧の資糧を積んで
〔完全なる〕仏陀の悟りを成就する
- 97 二つの〔障りの〕習気があるので
習気は〔輪廻の〕種字と言われている
種子が〔条件と〕出会うと
輪廻の芽が生じる
- 98 この世の守護者たちが示された教えは
有情の気質や能力に従って説かれた
故に、この世には多くの方があり
さまざまに異なった教えがある
- 99 深遠なる教えと広大なる教えという違いや
〔鋭い知性の〕ある者たちには両方の特徴を持つ教えなど
異なった教えが説かれたが
それらは空であり、不二である点で異なっていない
- 100 総持、〔菩薩の十〕地
仏陀の六〔波羅蜜〕はみな
菩提心的一部分であると
一切智者たちは説かれた
- 101 常にからだと言葉と心〔の行ない〕によって
このように有情を利益し
空を主張する者たちは
虚無論を主張しているのではない
- 102 偉大なる者たちは
輪廻にも涅槃にもとどまることはない
故に仏陀たちは
ここに不住涅槃を説かれている
- 103 慈悲と同じ味のものは功德となり
空の味は最高のものとなる

自他の利益をなすために
それ（空の甘露）を飲む者は勝利者の息子である

- 104 〔身・口・意の〕すべてによって〔偉大なる菩薩たちに〕礼拝するべきである
この世の指導者（菩薩）たちは
常に三界の供養に値するからであり
仏陀の系譜を代表してこの世にとどまっておられるからである
- 105 この菩提心は大乗の
最もすぐれたものと言われている
一心に努力することにより
菩提心を起こすべきである
- 116 自他の利益を成し遂げるには
この世界に他の方法はない
仏陀たちはこれまでに
菩提心以外の方法を見出されたことはなかった
- 107 菩提心を起こしただけで得られる
〔はかり知れない〕功德の集積に
もし形があるならば
虚空を満たしても余りある
- 108 誰かがただ一瞬だけ
菩提心に瞑想した時の
その功德の集積は
勝利者でさえはかることはできない
- 109 煩悩のない貴い心は
最もすぐれた唯一の宝である
煩悩という悪魔などの盗賊も
害することも奪うこともできない
- 110 輪廻における仏陀と菩薩たちの祈願が
揺るぎないものであるように
菩提心に住する者たちも
その心を〔揺るぎなく維持〕するべきである
- 111 あなた方も讃嘆の思いによって
ここで説明したように努力〔して修行〕するべきである
そうすれば、のちに普賢菩薩の〔祈願による偉大な〕行ないを
あなた自身が悟るであろう
- 112 最もすぐれた勝利者たちが称讃した菩提心を誉め讃えることにより
今日、私（龍樹）が得た比類なき功德によって
生存の海の波間に沈んだ有情たちが
両足尊（釈尊）の歩まれた道を進むことができますように

偉大なる導師聖ナーガールジュナによって著された『菩提心の解説』はここに完結した。イ

ンドの僧院長グナーカラと翻訳官ラブシ・シェニエンによって翻訳・編集され、のちにインドの僧院長カナカヴァルマとチベットの翻訳官パツァブ・ニマ・タクによって改訂された。

Japanese translation by Maria Rinchen, 2017